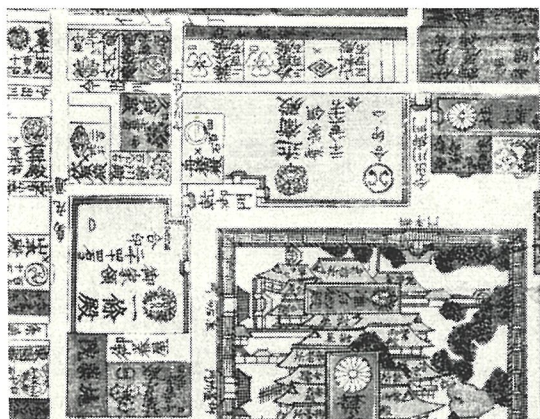




同志社

歴史散歩

同志社周辺

小野 則秋

男子部の今昔

南は御所に対し、北に相国寺を背にうけた同志社の地は、土地がら敷地の隅々の一石一草にもそこはかとなく歴史のにおいがしみこんでいる。

同志社は幕末の薩摩屋敷跡で明治になって桑畑になっていたところに寮舎を建てて、その後次第に拡張されて現在の広大なキャンパスに発展したのであるが、当時の薩摩屋敷跡というのは、クラーク記念館から西に理科学館、チャペル、彰栄館等を見渡した古い建物の並ぶ一帯である。現神学館付近から西に中学の正門あたりの線に一筋の通りがあつて石橋町といい、通りの南側、今出川通りまでの土地は維新前までは堂上公家の邸宅が門を並べ、東方図書館、有隣館の敷地は元伏見宮家の邸跡であり、栄光館付近から東は五摂家の一つ二条家の邸跡である。

大学正門付近から有終館に至る致遠館をふくめた敷地一帯は、江戸時代、禁中與力同心の長屋のあったところで、その西、有終館の敷地は山科三位家のあったところである。山科家は四条家の分れで、代々有職故実をもつ

て禁中に重きをなし、古くは足利時代に山科言継が出で、その日記『言継卿記』は有名な歴史々科であり、家集『権大納言言継卿集』は『群書類従』にも収められ、歌道にも傑出した文人であり、永禄十二年の織田信長の御所造営は言継の献策が力あったところといわれている。また幕末、明治の頃は、言繩が宮中の儀式、服制に関して家学の權威を發揮している。

山科家の西隣が現在もある冷泉家である。冷泉家のもと上冷泉と下冷泉と分れて二家あったが、今出川の冷泉家は上冷泉家で、代々歌道をもつて朝仕し、為相、為秀、為尹、為和、為満、為村など鎌倉、室町時代以来秀れた歌人を輩出し、『十六夜日記』の作者として国文学史上有名な阿仏尼は冷泉家の始祖為相の母である。

私は図書館学を専攻している関係上、歴史を考える時、すぐに書物や図書館と関連つける癖があるが、冷泉家は図書館史上でも歌学文献の宝庫として忘れてならない存在である。明徳館の裏手朽かけた土壁の中に見える土蔵がその時雨亭文庫で、定家以来の歌道図書や歴代の日記類を蓄えて血脈相統して、

その管理については禁裡においても重視し、江戸時代、貴重書が一部流出したので文庫を勅封管理にしたことが『譚海』に

上冷泉家に勅封閲覧といふこと有て、其人五十歳になれば勅使を玉はりて開封あり、一生涯先祖の書物披見を許さる也。卒去あれば又封ぜられ見ることもたはず。云々と見えている。これによつても所蔵資料が如何に重要文献であるかがうかがえよう。

冷泉家の西に藤谷家があつた。藤谷家は冷泉家の分家で昭和初期まで冷泉家と同じような門構えの古風な家が並んでいたが、今は同志社の敷地に買収されている。藤谷家もまた歌道を家学としていたが、業績としては冷泉家の右には出ていない。

藤谷邸の西に南北に今出川通りをよぎつて御苑内にぬける細い通りがあつて、往時に檜の筋と称していたが、華族会館建設の際につぶされてしまった。元華族会館（現在の啓真館）は徳大寺家の邸趾で正間や平屋の部分は徳大寺邸の遺構で、校友会館の敷地は庭の一部であつたものと思われる。

徳大寺家といへば明治、大正の元勳西園寺公望はこの家の出で、西園寺家を継いだ人で

あり、家祖は閑院公季より出で吹笛をもつて禁裡に奉仕した古い家柄である。

徳大寺家の西隣、現在の今出川交番の裏手から烏丸通りに添つて北に人文科学研究所のあたりまで、往時、武家伝奏竹内弾正の屋敷があつたが、これらの家は明治初年、堂上華族の東京移住によつて冷泉、藤谷二家を残すのみで取払われ、古老の話では、竹内屋敷の趾には小さな仏堂が建てられていて、明治中期頃まで浮浪者の寝ぐらになつていたと聞かす、華族会館建設の際取り除かれ、皮肉にも現在は交番が出来ていて浮浪者などこの界限には姿を見せない。

今出川通りをはさんで今出川御門を御苑に入つた右手一帯檜の筋までは近衛関白家の邸趾で、門を入れて右手の銀杏、櫟の大樹の茂つた小丘は近衛家で東山と称し庭先にあつた築山で、池に奇石千態の数寄が尽され、流れには架橋して万斛の涼風を濺わし、池のほとりには絲桜と呼ばれる彼岸桜があつて、小丘のすそに近衛家の文庫があつた。公家随一の邸宅として古く禁裡炎上などの際、天皇は近衛邸に遷座するのが恒例であつたという。

京都御所内にある東山文庫は近衛家の文庫を移築してからの名称で、このことを東山文庫の宸翰整理に奉仕した辻善之助博士が

東山御文庫といふのは、もともと偶然より起つた名である。京都御苑内の西北の隅の方にも近衛家の邸があつた。邸内の庭の東の方の小丘の下に一つの土蔵があつた。これを近衛家では東山の御庫と称して居た。明治十四年の頃近衛家の邸の取払はれるに際して、この東山の文庫の処分が問題となつた。明治天皇が之をお聞き遊ばされ、近衛忠熈公をして之を献上せしめられた。その後御所内に移築せられたが、尚旧称のままに東山御文庫と称え来つたのである。（京都御所東山御文庫について）と述べている。この文庫の本身は近衛家の東京移住の際は二条城や京都大学に預けてあつたが、戦前洛西宇多野に書庫を建ててここに集めた。これが現在の陽明文庫で、近衛家伝世のおびただしい綾秋玉軸の貴重古記録が平安京千年の歴史を秘めている。

近衛邸の西のはし檜の筋に面した一角に小さく舟橋家があつたが、舟橋家は家祖清原秀賢以来代々禁裡に儒学をもつて重きをなした

明経博士の家で家蔵図書も多く、舟橋文庫として知られ、蔵書には「天師明経儒」の蔵書印があるが、天子に明経を教ゆる儒家という誇りを示したものであろう。

舟橋家の門前、筋をへだてて向う隣に久我、堀川家があったが、それはさておき、近衛邸の東、今出川御門の道を隔てたところには桂宮邸があり、その東に中山邸が隣り、中山邸址には明治天皇の産湯の井戸も残っている。桂宮は八条宮智仁親王に始まり、豊臣秀吉が洛西桂村に別荘を造営して宮に献じたのが現存の桂離宮である。智仁親王は和漢の学を兼ね、和歌、連歌、発句を細川幽斎に学ばれ、桂の別荘には、当時、公家、文人を集めて歌会、句会を催すなど深く文事に心を寄せ、図書を収集して文庫を営んだが、蔵書は明治になって宮内庁図書寮に引継がれた。桂宮家の旧蔵本として『桂本万葉集』や宋版『呂氏家塾説詩記』など最も有名である。『桂本

万葉集』は加賀藩主前田利常の四女富子が智仁親王に輿入の際に祖母松子の贈として持参したものと伝えられ、輿入に書物持参とは流石にゆかしいことといえよう。

図書館、有隣館の敷地はかつて伏見宮邸のあったところ。伏見宮家は創立も古く崇光院の皇子栄仁親王を祖とし、歴代の記録を多く文庫に蓄え、稀代の愛書大名前田綱紀など尊経閣文庫の充実のためしばしば伏見宮家の記録を恩借して書写したもので、当時の綱紀の書翰の一節に「昨晚一卷宛致拜闊候之處、無比類御記録、驚愚眼候」云々の句も見え、その蔵書のすぐれていたことを物語っている。

また大量だけに虫蝕紛乱も相当あった様子で、綱紀の家臣からの報告文書に「思召の外大方の書物の混冊仕、及千年は書籍之分に文字紙等も切々に罷成、全部之義中々急に難摘候由」などいうもあり、その所蔵『経俊卿記』などは前田家で補修して返還したという記録も残っているが、江戸時代皇室財政のひ

つ迫の結果、文庫に貴重な資料を保有しながらも、その整理管理に充分手がとどきかねたものであろう。ともあれ、そのゆかりの地に現在も同志社大学図書館があるのも不思議の

えにしといえよう。

女子部とそのかみ

栄光館付近までが伏見宮邸跡で、明治二十年代までこの伏見宮邸の東側一画にひところ藤原北家の一つである清閑寺家の邸宅があり、同志社の初期は清閑寺邸が女子部と男子部のキャンパスを二分する境となっていたようである。

栄光館から東、現在女子部体育館にかけての一带は近衛家と肩を並べる摂関家の一つである二条家の邸跡で、明治期になって東部がラーネット邸その西が平安義会となり、旧邸の建物も一部残されていた。銅陀御殿といわれていたのがそれで、同志社の所有となつて家政教室建設のためおしむらく、取払われ、現在は往時の面影もないが、今出川通りの一角に当時門前にあった大きな棕櫚の枯株だけがわずかにありし日を偲ばせるのみである。幸いに邸内に古くから伝えられた茶室のみは、現在啓真館裏の空地に移築されており、これが寒梅軒で、現在茶道部学生の古典趣味修練のセンターとして利用されている。

二条家もまた中世以来文献の家として知ら



(舟橋家の蔵書印)

れ、『筑波問答』の著書二条良基など鎌倉時代既に文庫を構え博学多能、詞藻に富んだ閑白として知られ、累代撰閲家の日記はみな文庫に保存されて来たが、史料として有名な『二条殿日次記』と称するものはその一つである。

二条家は日記のほか歌書、故実書その他多方面にわたる数多くの秘記、文書の類を收藏し、当時朝廷、將軍家においても古記録の真正、勘弁には二条家文庫の資料によって対校するところが多かったと伝えられる。二条家の家蔵資料には「銅陀藏書」、「二条家図書記」の藏印が押されてある。

アーモスト館はこれも伏見宮家の屋敷内で、ここには宮家御付の公家侍の武家屋敷があり、その裏手一帯女子部の北側にかけては竹簾が茂り、狐狸の棲かであったが、現在竹簾は相国寺山内に僅かに一部面影を残すのみで、相国寺門前町は現在は狐狸ならぬ最も近代的知識人の住宅地帯と化している。

デヴィス先生が明治八年の秋初めて家族とともに京都に移住して住まれ、新島夫人等が子女を集め同志社女学校の前身ともいえる女子教育のスタートを切った柳原旧邸は、御

苑内運動場の中央部南寄りのところ、現在は庭樹の銀杏や樟樹二三本の他おもかげを伝える何物も残っていないが、文獻的には柳原家もまた図書館史上から除けない存在である。

柳原家の文庫もまた累代の図書を蓄えていた。江戸時代万治四年の京都大火で禁裡の文庫、親王家、公家文庫等の多くと運命を共にして一度は焼失したが、その後再興されて再び五棟の書庫を邸内に持つにいたったことが『閑窓自語』に

万治四年の火に、当家文書のくら板くらなのもの、北の敷地にありけるがやけぬ。書ども少々とりくといへども、火急にしてのころところ十の一にも及ばず。曩祖兵部卿俊官殿の卿一流の文書を按察のすけあきのらにつたへしめ給ふ所にて、たびたびの兵乱にあひしかども、およそつがなくもちつたへたるを、大かたうしなひぬ。なけくにも猶あまりあり、この外、身の具ふるき調度などいふもさらなり。その後、宝永の火にも、くら一字やけぬ。又文書をうしないぬ。天明の火にこそ、五箇所のくら一字もやけず、文書一巻もやきうしなはずひとへに祖神の

加護とおほえ侍るなり。

と見えて、天明の火には焼けず幕末まで伝えられてきた。この文庫の蔵書は時代の嵐にもまれて四方に離散してしまつたが、蔵書印には「日野柳原秘府修竹之印」、「日野柳原秘府図書」、「窓外不出」、「極秘」などの印記があり、柳原家として極めて重要な文庫であつたことが知られる。

春風秋雨、かくてそれからこの同志社の地も百余年の時が流れた。この星霜の中に往時は堂上、貴籍の邸宅がいらかを並べて門を接し、幕末維新当時は尊王攘夷、公武合体と次に襲う時代の波のはげしくうず巻く地帯となり、大刀をたばさんだ志士や衣冠束帯の公家たちのゆきかきも繁かつたであろう。劇的な時代を過ぎて、今では当時の家並のあととは洋式の近代校舎の並ぶ学園と代つた。

古くは日本文教の中心であつたこの地は、今もむかしの静かなアカデミックな雰囲気を持ただよわす学園として、良識ある良心の充滿した丈夫の来ることを良心碑はひそやかに学生を迎えて門内に立っている。

(同志社々々編集所主任)